

共立女子大学大学院看護学研究科（修士課程）の 開設とカリキュラムの特徴

The Establishment of Kyoritsu Women's University Graduate School of Nursing

北川 公子
Kimiko Kitagawa

キーワード：看護学研究科、修士課程、カリキュラム、教育目標

key words：Graduate School of Nursing, Master's Program, Curriculum, Educational Goals

要 旨

平成 29 年 4 月に開設した共立女子大学大学院看護学研究科（修士課程）の設置までの経過を振り返るとともに、教育課程の構成とその特徴を紹介した。さらに、本研究科の当面の課題として、入学定員の充足、ならびに臨床経験をもった本学看護学部卒の大学院生、あるいは学部卒業と同時に大学院に挑戦する看護学部生の排出を挙げた。

I はじめに

共立女子大学大学院看護学研究科（修士課程）（以下、本研究科とする）は、平成 25 年 4 月に開設した共立女子大学看護学部の完成年次に合わせて、平成 29 年 4 月、共立女子大学大学院文芸学研究科、家政学研究科、国際学研究科に続く 4 番目の研究科としてスタートを切った。本研究科第一期生は、入学からほぼ 1 年を経過し、現在、研究計画書の作成を進めている。本稿では開設準備から開設後の約 1 年を振り返り、改めてカリキュラムの特徴を紹介するとともに、今後の課題を展望してみたい。

II 共立女子大学大学院看護学 本研究科（修士課程）の概要

1. 開設までの経過

平成 29 年 3 月末の本学看護学部の完成年に合わせて本研究科を開設するために、平成 28 年 3

月の文部科学省への設置認可申請に向けて、平成 27 年 2 月から看護学部と事務方による打ち合わせが始まり、平成 27 年 4 月から看護学研究科設置準備ワーキングチームが発足した。

本申請までの準備期間は約 1 年であり、この間に本研究科の方向性を定め、人材養成目的を基盤としたカリキュラム作り、教員組織の形成、施設設備の補強などが行われたが、かなりタイトなスケジュールであった。まず、申請に対する学内合意を得るための準備が急ピッチで進められ、平成 27 年 4 月下旬～5 月末までに、大学・短大将来構想専門委員会、学園将来構想委員会、常務理事会、評議員会・理事会の承認を順次得ていった。学内合意が得られた 6 月以降、学生（大学院生）確保の見通しに対する看護学部在学生や共立女子短期大学看護学科卒業生、実習施設を対象とするアンケートや教育組織の整備に着手した。

本申請までに複数回、文部科学省への設置認可申請に対する相談に赴き、指摘を受けた内容の修

正を行い、平成28年3月、無事に認可申請の書類を提出することができた。この間、多い時には毎週のように開催された準備ワーキングに参加し、議論し、膨大な事務書類を作成し、学内外の調整に腐心してくださった事務職員各位の尽力に、改めて感謝申し上げたい。

設置認可申請に対して、平成28年5月に文部科学省からの審査意見が提示された。幸い、教員組織に対しては追加公募を必要とするような意見はなかった。また、教育課程構想に対しても、修士論文作成スケジュールの十分な期間の確保や、実務経験者とストレートマスターそれぞれに対する指導方法の特徴の明確化など、骨子そのものへ指摘はなかった。そのため、説明が不足していた事項への追加資料の作成により対応することができた。

このように本研究科の開設までの経緯における特徴は、一人の教員、一人の大学職員の大きなリーダーシップ、あるいは構想によって作り上げられたものではないということである。現有の教職員組織が、それぞれの経験と知恵と時間を出し合い、現有の資産を最大限に生かすことで、実現可能な新規性をもった課程の構想を作り上げたということではないだろうか。

2. 本研究科の枠組み

日本看護系大学協議会の会員校のうち、大学院を設置している看護系大学は平成29年度現在、190校であり、そのうち平成29年4月に開設した看護学研究科は公立1校、本学を含め私立4校の計5校である。看護系大学・大学院としては後発であること、東京都内には多くの大学院があること、また看護学研究科修士課程での定員割れを複数の教員が前任校で経験していたことなどをふまえ、入学定員を5人とした。

また、近年、修士課程での社会的ニーズが高度専門看護師に高まりつつある現状ではあるが、本学は看護以外の医療系学部や附属病院を持たないこと、現段階で、修士課程新設に伴う教員増は望めないことから、高度専門看護師の養成課程を設ける構想を持つことは難しかった。そのため、今後も周辺地域での看護学部新設が見込まれ、教員組織の流動性は当面続くことを予測し、教員の入れ替わりがあったとしても継続性が担保できるこ

表1 共立女子大学大学院看護学研究科の概要

開設年	平成29年(2017年)4月
名称	看護学研究科 Graduate School of Nursing
設置場所	東京都千代田区神田神保町3-27 (神田一ツ橋キャンパス)
学位	修士(看護学) Master of Nursing
修業年限	2年
入学定員	5人

表2 共立女子大学大学院看護学研究科
(修士課程)の教育目標

1. 看護学及び看護実践に関連する分野の理論と最新の知見を活用することのできる論理的思考力を育成する。
2. 看護実践上の課題を見出し、研究を計画・実施し、課題解決のための方略を提案することのできる能力を育成する。
3. 高度なアセスメント能力と対人支援能力を基盤とした、看護実践の質の向上を牽引する能力を育成する。
4. 保健医療福祉の政策・制度、組織及びシステムに働きかけ、療養生活並びに健康生活を支える環境を改善する能力を育成する。
5. ケアの対象者並びに多職種の持つ多様な価値観や背景を理解し、研究及び実践における連携・協働を推進する能力を育成する。

と、また、現在、強く国民に求められている、高度医療と地域での生活の円滑な橋渡しに対して優れた専門性を発揮しうる能力の涵養を、本研究科の目指す方向性とした。

そこで、表1の本研究科概要のもとに、「広い視野に立って精深な学識を身に付け、高度化・複雑化する健康課題に対して展開される看護実践を科学的に検証し、支援技術の向上と新たな支援方法の開発に貢献できる研究能力・看護実践能力を有する人材を養成する。」を人材養成目的とし、これを基盤とした教育目標として、表2の5点を掲げた。なお、本研究科は男女共学である。

Ⅲ カリキュラムの特徴

1. 教育課程編成の考え方

現在、わが国は、「治す医療」から、生活を主眼におきながら利用者・家族を支援する「支える医療」へとヘルスケアシステムを転換し、疾病や障がいと共存しながら生活の質の維持・向上を図

ることへの貢献が求められている。また、「住み慣れた地域で尊厳のある生活の継続」を保証するには、健康な時の生活と病気の治療やそれに伴う療養生活とが分断することなく、円滑に移行できる、すなわちケアサイクルが滑らかに循環していなければならない。このケアサイクルを円滑に回転させるには、「療養生活」と「健康生活」、それぞれをより充実させるための知見、「療養生活」と「健康生活」の間を円滑に移行するための知見が求められる。加えて、ケアサイクルを循環させるには、「療養生活」「健康生活」が展開される場に根ざしたケアと、複雑なニーズに対応した統合的なケアが不可欠である。このため、生活と支援（ケア）の継続性を重視した名称を用いて、本研究科の教育課程を、「療養生活支援看護学領域」と「健康生活支援看護学領域」の2領域を柱として編成した。図1は、この2つの循環に基づく領域と科目の関係を示したものである。

さらに、科目構成としては、看護学における研究能力・看護実践能力の共通基盤となる科目からなる『共通科目』、領域横断的な知識と専門分野における研究能力・看護実践能力を深める教育課程編成上の柱である『専門教育科目』、『共通科目』『専門教育科目』を通じて修得した幅広い視野と専門的な観点から課題を捉え、分析し、解決策を考案する能力を用いて学位論文としてまとめている『特別研究』の3つの科目区分を設けた。このように、2つの領域と3つの科目区分を教育課程の主軸とし、表2に示す5つの教育目標を達成するため教育課程編成の方針（カリキュラムポリシー）を表3に示す。

2. 科目の構成

本研究科の科目構成は表4のとおりである。修了要件は、『共通科目』において必修科目4単位を含め10単位以上、『専門教育科目』において主として専攻する領域の総論2単位、特論2単位及び演習4単位の計8単位以上、『特別研究』8単位を含め、30単位以上を修得するとともに、必要な指導を受けた上、修士論文の審査及び最終試験に合格することが求められる。

『共通科目』は8科目で構成している。看護実践上の課題を見出し、研究を計画・実施し、課題解決のための方略を提案するための基盤となる能

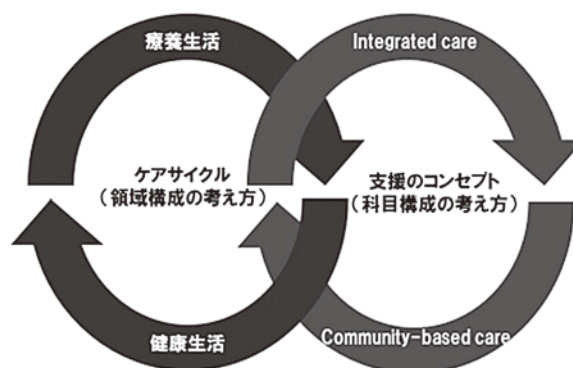


図1 共立女子大学大学院看護学研究科（修士課程）の教育課程の構造図

表3 共立女子大学大学院看護学研究科（修士課程）のカリキュラムポリシー

1. 看護学及び看護実践に関連する理論と最新の知見を通して健康課題を分析し、専門性を深化させるための科目を、「療養生活支援看護学」「健康生活支援看護学」の2領域から成る『専門教育科目』に配置する。『専門教育科目』には、特定の分野に焦点をあて、専門的な知識と思考を修得する特論、専門分野の枠を超え、専門性の支えとなる広い視野と知識を修得する総論と演習を配置する。
2. 看護実践上の課題を見出し、研究を計画・実施し、課題解決のための方略を提案する能力の基盤となる科目を『共通科目』に配置するとともに、広い視野と深い専門的思考から課題を捉え、洗練する能力を涵養する科目を『専門教育科目』に配置する。さらに、研究を展開する能力としてこれらを統合する『特別研究』へと繋げる。
3. 看護実践の質の向上に向けた、高度なアセスメント能力と対人支援能力の基盤となる科目を『共通科目』に配置する。
4. 療養生活並びに健康生活を支える環境の改善に向けて、保健医療福祉の政策・制度、組織及びシステムに働きかける能力の基盤となる科目を『共通科目』に配置する。
5. ケアの対象者並びに多職種の持つ多様な価値観や背景を理解し、連携・協働のもとに高度看護実践を展開し、牽引する基盤となる科目を『共通科目』に配置する。
6. 『共通科目』の学修から得た知識の、「療養生活支援看護学」「健康生活支援看護学」の各領域における研究・看護実践への適用・応用について理解を深めるための科目区分として『専門教育科目』を配置する。

力の強化を目指し、「研究方法Ⅰ（看護研究概説）」、「研究方法Ⅱ（量的・質的研究法）」の2科目を必修科目とした点はカリキュラムの特徴の一つである。本2科目では、看護実践における研究を進め

る上で求められる倫理的姿勢、量的・質的研究の基礎、研究デザイン、研究プロセス、量的・質的研究法の特徴・限界・方法論の修得を目指す。

『専門教育科目』の「療養生活支援看護学領域」には、「看護管理学特論」「小児看護学特論」「成人看護学特論」「老年看護学特論」の4つの特論を、「健康生活看護学領域」には、「地域看護学特論」「母性看護学特論」「精神看護学特論」の3つの特論を配置した。また、支援の課題やあるべき姿を多角的に検討することができるよう、「療養生活支援看護学総論」「健康生活支援看護学総論」は、領域を構成する全教員によるオムニバスの運営とした。さらに、ケアサイクルの観点から2領域の相互理解の必要性を重視し、学生に対して「療養生活支援看護学総論」「健康生活支援看護学総論」を合わせて履修することを推奨し、包括的

な視点から高度な看護学の学術理論とその応用を修得することを可能とした。

「療養生活支援看護学演習」及び「健康生活支援看護学演習」においては、表5に例示する科目概要のように、文献検討、フィールドワークとその成果発表、ディスカッションを通じて、研究疑問を洗練し、『特別研究』に向けて効果的で実施可能な研究計画の立案へと繋がるよう展開する。このような領域横断的なカリキュラムによって、多様な場、多様な健康のありよう、多様な職種、そして多様なアプローチに対する共感力高める工夫がなされている。

なお、本研究科は社会人に対応した開設であるため、ウィークデイの開講は18時40分～20時10分までの6限、土曜日の開講は1限（9時開始）～6限までを最大枠とした。1年前期は科目

表4 共立女子大学大学院看護学研究科（修士課程）の科目構成

科目区分		授業科目の名称	配当年次	単位数	
				必修	選択
共通科目		研究方法Ⅰ（看護研究概説）	1 前	2	
		研究方法Ⅱ（量的・質的研究法）	1 後	2	
		看護倫理	1・2 後		2
		フィジカルアセスメント	1・2 前		2
		対人援助論	1・2 前		2
		看護教育論	1・2 後		2
		保健医療福祉政策論	1・2 後		2
		多職種連携	1・2 前		2
専門教育科目	療養生活支援看護学領域	療養生活支援看護学総論	1 前		2
		看護管理学特論	1 前		2
		小児看護学特論	1 前		2
		成人看護学特論	1 前		2
		老年看護学特論	1 前		2
		療養生活支援看護学演習	1 後		4
	健康生活支援看護学領域	健康生活支援看護学総論	1 前		2
		母性看護学特論	1 前		2
		精神看護学特論	1 前		2
		地域看護学特論	1 前		2
		健康生活支援看護学演習	1 後		4
特 別 研 究		2 通	8		
修了要件単位		—	12	18	

表 5 療養生活支援看護学演習の科目概要

<p>疾病や障がいをもつ小児・成人・老年期の各ステージにある人々と家族の療養生活の質ならびに療養環境の安全性の向上を支援する看護実践上の課題について、学生自身の問題意識や経験にもとづき、国内外の文献検討及びフィールドワークを行い、その成果発表とディスカッションを通じて研究疑問を洗練する。さらに、研究疑問に適した研究デザインを選定し、計画書を作成するまでの一連の過程を通して、研究計画立案のための基礎的能力を発展させる。</p> <p>なお、本科目の運営については、問題意識の掘り下げと問題意識の包括的検討の双方向から探究できるよう、研究計画作成のプロセスにおける「文献検討」「フィールドワークの計画と実施」「研究計画立案」は、学生の研究疑問に直結した分野で指導を行い、「研究テーマの発表と討論」「文献検討結果の発表と討論」「フィールドワーク成果の発表と討論」「研究計画の発表と討論」は分野横断的に指導を行う。（共同／全 30 回）</p>	
--	--

受講のためほぼ毎日、ウィークデイの 6 限は開講していたが、土曜日は午後の方の開講で時間割を組むことができた。

Ⅳ 修士論文の作成

『特別研究』は、『共通科目』『専門教育科目』を通じて修得した、幅広い視点と専門的な観点から課題を捉え、分析し、解決策を考案していく能力を用いて、指導教員の研究指導を受けつつ、学位論文をまとめていく集大成の科目として位置づけている。単位数については、研究課題の明確化、研究計画書の作成、研究計画報告会、中間報告会、修士論文提出後の修士論文発表会という一連の学修を考慮し、8 単位に設定した。

研究指導においては、複数教員による研究指導体制及び論文審査体制をとることに加え、各報告会や発表会を、直接の指導者以外の教員からも助言を受けられる機会とした。科目としての特別研究は 2 年次通年科目ではあるが、表 6 の論文作成過程に示すように、1 年次の 4 月時点で主副の指導教員を設定し、学生は初年度から研究計画の指導を受け、論文を仕上げていく。

Ⅴ 第 1 期生を迎えて

最初の入試は、平成 28 年 12 月 3 日と平成 29 年 2 月 17 日の 2 回、行われた。精神看護学分野

表 6 修士論文作成過程の概略

年次と時期		事 項
1 年次	4 月	研究課題の概要提出 主指導教員・副研究指導教員・主専攻領域の決定
	2 月	研究計画書作成（～5 月）
	3 月	研究倫理審査委員会における審査（～7 月）
2 年次	5 月	修士論文題目・研究計画書提出
	6 月	研究計画報告会
	10 月	中間報告会
	11 月	修士論文審査開始申請書提出
	1 月	修士論文・論文要旨提出
	2 月	修士論文発表会（公開）
	3 月	合格判定

に 3 人、地域看護学分野に 1 人の受験者があり、全員が合格した。平成 29 年 4 月、4 人の第 1 期生を迎えた。全員が実務経験の比較的長い社会人であり、残念ながらストレートマスターの入学はなかった。

4 月の入学当初は、オンライン化された履修登録や時間割確認、図書館のシステムなどの教学ネットワークに対応することや、ほぼ毎日開講される 6 限の科目受講に対応することに四苦八苦している様子がみられた。それでも、21 時頃、元気な話し声を響かせながら帰路につく 1 期生の声は、教員の励みでもあった。現在、健康生活支援看護学演習の受講に伴い、論文のクリティーク、研究課題や研究方法の探索、研究の実行可能性を確認するためのフィールドワークを進め、それぞれが研究計画の作成に専心しているところである。

また、第 2 期生を迎えるために、開設 2 年目の今年は、他の研究科と同一日の入試となり、10 月日程の 2 月日程の 2 回の入試を行う。すでに 10 月日程を終えて、3 人の合格者を出したところである。

Ⅵ おわりに

本研究科の当面の課題は、第 1 期生全員を、修業年限の 2 年で無事、修了させることと、入学定員の充足を、毎年、コンスタントに継続すること、7 つの専門分野すべてに大学院生がいることを普

通の状態にすることである。このような大学院の様子を学部生が身近に見ることによって、数年のうちに、実務経験をもった学部卒の大学院生、あ

るいは学部卒業と同時に大学院にチャレンジするというのが、共立女子大学看護学部の平常の姿となることを少し先の将来の期待としたい。